

本書の目的

この本で目指したことは、「学習の風景」を変えることです。日本語教育の歴史を辿ると、1980～1990年代は、いわゆる文法や文型が中心の日本語教育が展開されていました。2000年の少し前から、コミュニケーションやインターアクションといったことばとともに、学習者同士の会話や学習者自身の表現を重視するようになっていきました。しかし、一方で「教師が学習項目を教える—学習者は習得する」といった「習得メタファー」に基づいた実践も少なからずあるように思います。習得は大切なことですが、教師が知識を学習者に提示し、学習者がその知識を頭の中に貯金していくという、「銀行型の教育」は、実は「習得」とは遠いところにあります。「習得」はもっと複雑なプロセスで、人のlife（生）に関わるものです。この本は、学習者が実際に話したストーリーが書かれています。これらのストーリーを読んでいくと、ことばの学習というのは、生活、家族、仕事、社会、経済、政治、そして人生の中に埋め込まれていることがわかります。グローバルな移動が日常となり、日本に来る学習者の状況や目的が多様化した今、「銀行型の教育」とは違う、新たな学習のアプローチが必要なのではないかと考えました。そこで、学習者の「life（生）・社会・参加」をキーワードとして、学習者の日常のストーリーをもとに話し合う教材を作りました。学習者自身のアイデンティティの構築やエンパワーメントを目指し、学習者とサポーターがともに暮らすこの社会について、クリティカルに考えるための教材です。

本書は、リソース型教材です。地域で使うことを想定して作りましたが、留学生にも、また、将来日本語教育に携わりたいと考えている教師の養成に

も使えると考えています。いろいろな場面で使えますが、読解教材としてではなく、ここにあるストーリーをリソースとして、おしゃべりをしていく、そんなふうに使ってください。また、一つ一つのストーリーが独立しているので、最初から順番に進める必要はありません。ちょっと時間が余ったとき、特に教材を決めていないときなど、楽しみながら「学習の風景」を変えていってほしいと思います。

この教材の使用例が以下の論文にあります。

- *八木真奈美・池上摩希子・古屋憲章（2019）「個人の経験を社会・変革・未来へつなげる実践を目指して—ナラティブをリソースとする教材作成の試み」『言語文化教育研究』第17巻, pp.405-424. URL : <https://doi.org/10.14960/gbkkg.17.404>
- *八木真奈美（2020）「Personal linguistic landscapeをデザインする実践の「場」—学習と人生を結ぶために」第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム論文集 URL : <https://www.eaje.eu/ja/symposium/46>

